湛甘泉における「勿忘勿助」

志賀一朗

序

「勿忘勿助」は、孟子の「必有事焉。而勿正。心勿忘。勿助長也。」（公孫丑上）に由來するものであるが、湛甘泉はこの語を、彼の學說である「隨處體認天理」の裏づけとして、生涯を賭けて究明した。「勿忘勿助」こそは、甘泉の學的根據である。

では、湛甘泉はこの「勿忘勿助」を、いかに解釋し體系を立て、「隨處體認天理」の說の論據としたであろうか、述べてみたいと思う。

一　「甘泉文集」に見える「勿忘勿助」

「甘泉文集」三十二卷中、「勿忘勿助」に關して述べているところは、九十五ヵ所ある。これを卷別にすると、次ぎのようになる。

卷　一　樵語
卷　二　新論
卷　三　雜語……2
卷　四　知新後語
卷　五　二業合一訓
卷　六　大科訓規
卷　七　書……12
卷　八　新泉問辯錄……5
卷　九　新泉問辯續錄……7
卷　十　問疑錄
卷十一　問疑續錄……12
卷十二　金陵問答
卷十三　金臺問答
卷十四　書問……2
卷十五　書問
卷十六　古樂經傳惑問
卷十七　序……9
卷十八　記……4
卷十九　章疏……1

卷二十	講章……6
卷二十一	雜著……5
卷二十二	約言……4
卷二十三	語錄（天關語通錄）……11
卷二十四	楊子折衷略……2
卷二十五	非老子略
卷二十六	詩……5
卷二十七	續詩……2
卷二十八	歸去紀行略……1
卷二十九	嶽遊紀行略……2
卷三十	祭文……2
卷三十一	墓誌銘表……1
卷三十二	外集

右の表を見ると、「勿忘勿助」が三十二卷中、二十卷に出ている。なかんずく、「書」(12)・「新泉問辯錄」(5)・「新泉問辯續錄」(7)・「問疑續錄」(12)・「序」(9)・「講章」(6)・「雜著」(5)・「語錄」(11)・「詩」(5)等に比較的多い。これは、手紙あるいは、弟子たちとの問答や作詩などで、甘泉の考えを述べているからでもあろう。

二　「勿忘勿助」の語源と傳承

「勿忘勿助」は、「序」にも述べたように、「孟子」の公孫丑（上）にある「勿正。心勿忘。勿助長也。」の語を簡略にしたものであるが、この語は、湛甘泉によれば、また、「論語」子罕編にある「子絕四。毋意、毋必、毋固、毋我。」に基づくという。そのことは、史氏恭甫が新泉精舍（甘泉が弟子に學を講じて所）の前に「自然堂」を建てたとき、甘泉がその堂のために作った「序」の中に述べられている。

> 蓋①先生自然之說、本於明道覺自然之說、無絲毫人力之說、明道無絲毫人力之說、本於孟子勿忘勿助之說、孟子勿忘勿助之說、本於夫子無意必固我之教。（甘泉文集卷二一「雜著」〈自然堂序〉頁三～四）
>
> 注① 陳白沙

これによれば甘泉は、孔子の「無意必固我」の教が、孟子の「勿忘勿助」の說となり、さらに程明道の「無絲毫人力」の說、陳白沙の「自然」の說になったとするものである。

この考え方は、「默識堂記」に、孔子の道は顏回に傳わったが、顏回が沒してからは、子思を通して孟子に傳わり、それが周濂溪・程明道・陳白沙に傳わったと述べているのと符合する。

さて、ここでいう孔子の道とは、そもそも何であろうか。湛甘泉はこれを、「以天自處。」とし、「默識」として把握している。

文王默識之道、同於天。文王沒、道在孔子。故語子貢曰、予欲無言。蓋以天自處。此孔門之本教也。子貢疑焉。曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉。孔子後、道在顏子。故明道程氏曰、惟顏子便默識。默識不待啓。啓不待語。故曰、顏子沒而聖人之學不傳。子思沒、道在孟子。孟子曰、必有事焉。而勿正。心勿忘。勿助長。蓋發默識之功也。周濂溪曰、無思而無不通、爲聖人。程明道曰、勿忘勿助之間、緣無絲毫人力。此其存之之法。孟子之道在周・程。周・程沒、默識之道在白沙。故語予、日用間隨處體認天理、何患不到聖賢佳處。（甘泉文集巻一八「記」〈默識堂記〉頁一九～二〇）

湛甘泉が「默識堂記」を書いたのは、九十四歳の年である。彼はこの年を、みずから、伏生の言語支離の年として、默翁と號した。それは甘泉が沒する一年前であって、どことなく彼の心境が伺われる。

それでは、孟子の文を簡略にして、「勿忘勿助」としたのは、だれに始まるのであろうか。「甘泉文集」の「伊川唐錄序」（巻一七「序」頁三三～三四）によれば、それは程明道であることがわかる。

「伊川唐錄序」は程伊川を表章した書で、伊川の緒言を述べた唐棣彦思を、湛甘泉の門人、唐府紀善・周生衝が表したものである。

この序によれば、程明道が「無絲毫人力」に合わせて、「勿忘勿助」といっている。これは程伊川のいう「體用一原、顯微無間。」と對應するものである。

吾師白沙夫子、手授遺書於水①曰、孔孟正脈也。水受而讀之、三十餘年矣。水之讀之也、於明道之言、渾然如和氣至矣。其乾道之圓以知也。於伊川之言、確然如肅氣至矣。其坤道之方以能也。伊川曰、吾之學與兄同。果若是班乎。明道曰、勿忘勿助、無絲毫人力。伊川曰、體用一原、顯微無間。夫子之學、果若是異乎。（甘泉文集巻一七「序」〈伊川唐錄序〉頁三三）

注① 甘泉は名を若水という。

三 「勿忘勿助」の解釋

さて、湛甘泉は「勿忘勿助」をどのように解釋したであろうか。既述の「甘泉文集」中の「勿忘勿助」九十五ヵ所を分析すると、「自然（12）・「天理」（12）・「中正」（12）・

「敬」（8）・「機」（7）・「全放下」（3）・「聖人」（2）・「持志」（2）・「盡力」（1）などとなる。ただ注目すべきは、王陽明の「致良知說」に對して、反駁している所が四ヵ所ある。

これはさておき、さらに整理すると、「自然」「天理」は本體論であり、「中正」から「盡心」までは內容論である。以下この觀點から述べてみよう。

1　本體論

「自然」と「天理」の關係は、後述にゆずり、まず「天理」について述べることにする。天地自然の理を「天の理」すなわち「天理」という。「自然」は絲毫の人力も加えることはないが、一定の法則にしたがって運行している。この事實を孔子は、「天何言哉。四時行焉、百物生焉。」（論語「陽貨」）といわれたが、「天何言哉。」は「自然」を指し、「四時行焉、百物生焉。」は「天理」をいったものである。

さて、湛甘泉は、「勿忘勿助」と「天理」との關係をどう見たであろうか。

劉延繹が湛甘泉に、理には動靜がないのに、心にどうしても動靜が生じ、一つにならない苦衷を訴えると、甘泉は、

「人の心は本來動靜がない。自分で動靜を作るのだ。だから、勉強すれば動靜を忘れる。すなわち『天理』を『勿忘勿助』の間に體認すると、應酬も讀書も擧業も一つとなる。それは頑鐵が洪爐にはいると同じで、累とするに足りない。そればかりかお互いに助け合う。」

と答えた。

劉延繹問、理無動靜。得靜時或違於動處、遂使斯心明而後晦。今求有以一之、未知何以。

人心無動靜。人自有動靜時、自有動靜。學能忘其動靜。一味體認天理於勿忘勿助之間、則應酬・讀書・擧業一以貫之。如頑鐵之入洪爐。何足累乎。乃相資也。（甘泉文集卷一一「問疑續錄」頁三～四）

また、湛甘泉は王如賓に、人は心を「勿忘勿助」の間におけば、「天理」はおのずとあらわれ流行するといっている。

孔子所謂中庸、卽吾之所謂天理。體認天理之學至易至簡。途之人頃刻知而爲之、立地可以超聖。但憾學者不肯爲。與爲之者不得其門耳。若有存心於勿忘勿助之間、天理自見、天理自流行。何不可能之有。（甘泉文集卷二〇「講章」頁三三～三四）

湛甘泉はさらに「四言詩」で、心に一物なければ「天理」

があらわれる。「天理」の本體は「自然」である。「自然」は廓然渾大であるが、四時がおのずと行なわれている。「勿忘勿助」の修行が深まれば、聖人となり、天と同じになるといっている。

心無一物　天理見前　何爲天理　本體自然　廓乎渾兮
四時行焉　勿忘勿助　聖則同天（甘泉文集巻二六「詩」〈示諸學者〉頁二）

謝上蔡が祁門に歸る際、贈った詩にも、「忘助兩勿の間、天理自ら呈す。」と詠んでいる。

吾聞謝上蔡　克己最精明　自謂知本體　主翁長惺惺
如何習危墟　未去十年矜　忘助兩勿間　天理自已呈
眞機一入手　驕吝何由生　歸哉謝氏子　九萬愼程鵬
（甘泉文集巻二六「詩」〈贈謝生顯歸祁門〉頁一四）

2　內容論

「天理」の體認は、心を「勿忘勿助」の間におくことである。心を「勿忘勿助」の間におくということは、心に「一物」もないこと、すなわち心にもないことを意味する。これはまことに自明の理であるが、實踐するとなるとむずかしい。そこで甘泉は、その內容として、「敬」「中正」「機」「全放下」「持志」「盡心」などの語をもって說いている。

ア　「勿忘勿助」と「敬」

「敬」は湛甘泉の學說「隨處體認天理」の說の最高內容である。この學說を裏づけた「心性圖說」には、「敬とは戒懼愼獨して、その中を養うなり。」といっている。「中」は「天理」のあらわれた狀態である。

では、なぜ「中」といわず「敬」といったのであろうか。甘泉が黃孟善に答えた手紙に、「敬字は宋儒の論評なり。」といっていることからすれば、宋儒は「敬」について論評することが、宋儒たる面目を保持する所以であったからであろう。

この「敬」を程明道は「主一」といった。甘泉はこれを受けて、「主一は心にもと一物なきなり。もし一物あれば、すなはち一にあらざるなり。」と說明している。

この「一」とは何であろうか。「一」は「理」そのもので、「天理」の別名である。だから葛澗が甘泉に、「敬」について質問したとき、甘泉は、

敬者一也。一者無欲也。（甘泉文集巻三「雍語」頁二）

と答えている。

「敬者一也。」ということは、「敬」すなわち「一」ではなく、「敬」は「一」の內容であり、「一者無欲也。」とは、「無欲」は「一」に至る修行を意味する。したがって、「無

欲」は「敬」の修行規定である。

湛甘泉が聶文蔚に答えた手紙にも、「敬」は「主一」であり、心中「一物」もないことであるといっている。なおこの手紙文で注目すべきは、「勿忘勿助」の間が、すなわち「一」であるといっていることである。

程子云、主一之謂敬。主一者心中無有一物也。故云一。若有一物、則二矣。故孟子曰、心勿忘。勿助長。勿忘勿助之間、乃是一。（甘泉文集 巻七「書」〈答聶文蔚侍御〉頁二九～三〇）

さらに、「『勿忘勿助』はもとただ一個の敬の字を説く。先儒いまだかって、忘に堕せざればすなわち、助に堕する所以を発出せず、忘助は皆心の本體にあらざるなり。」といっている。

勿忘勿助元只是説一個敬字。先儒未嘗發出所以不墮於忘則墮於助。忘助皆非心之本體也。此是聖賢心學最精密處、不容一毫人力。（前同頁三〇）

これを見れば、「勿忘勿助」は元来「敬」を説いたものであることがわかる。したがって、「勿忘勿助」を體認すれば、「敬」に達することになる。湛甘泉が鄧君恪に答えた手紙にも、「よく敬を主とすれば則ち衆善く歸す。『勿忘勿助』は敬の謂なり。故に曰く、敬は德の衆なり。」といい、また、「よく敬を主とすれば則ち事事あらざることなし。今更に別法なし。ただ『勿忘勿助』の間、調停着けざるべからざること緊理會なり。」といっている。

適來簡中、足見用心。然尚似未得其方者。尋常説集義、與區區所見不同。區區以集者、如墟集之集。能主敬則衆善歸焉。勿忘勿助敬之謂也。故曰、敬者德之衆也。此卽精一功夫。若尋常所謂集者、乃於事事上集。無乃義襲耳。此内外之辯也。然能主敬則事事無不在矣。今更無別法、只於勿忘勿助之間、調停不可不着、緊理會也。（甘泉文集 巻七「書」〈答鄧君恪問集義〉頁二一）

湛甘泉は「四書古本測」を修復したとき、「序」を書いた。そこでも、「それ敬はすなはち『勿忘勿助』の間これに盡く。」という。

仁也、四端也、本心也、物也、獨也、皆天之理也。格之也、愼之也、求之也、擴充之也、皆以體夫天之理而已也、其功則其誠。其敬則勿忘勿助之間盡之矣。（甘泉文集巻一七「序」〈修復四書古本測序〉頁一三）

甘泉はさらに、「雍語」の中でも、「『勿忘勿助』は敬の規矩たるか。」といっている。

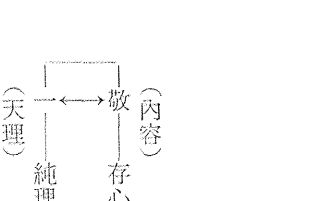
甘泉子曰、孟子之學其至矣乎。勿忘勿助其敬之規矩

矣乎。孔子之學非孟子弗明。（甘泉文集巻三「雍語」頁五）

世宗の嘉靖十年（一五三一）、六十六歳の十一月二十七日、湛甘泉は「進聖學疏」を作り、同十二月九日、世宗に奉った。その疏に、「敬」と「勿忘勿助」「天理」との關係を明析に述べている。

聖訓所謂敬一是也。云敬者、存其心而不忽之謂也。一者純乎理而不雜之謂也。此二者極爲明切、又默契乎。孟子必有事焉。而勿正。心勿忘。勿助長之指也。夫所謂純理而不雜卽天理也。孟子所謂必有事焉者卽此也。存心不忽卽敬、以體認夫天理。孟子勿忘勿助之謂也。夫忘則不及。助則過焉。皆非所謂存心不忽也。夫一者天理也。敬者勿忘勿助以體認乎天理、令有諸己焉也。故日用之間、隨時隨處隨動隨靜、存其心於勿忘勿助之間、而天理自見焉。（甘泉文集巻一九「進聖學疏」抄頁二七～二九）

これによると、聖人の教は「敬一」である。「敬」とは「存心不忽」のことであり、「一」は「天理」であり、「純理不雜」のことである。「純理不雜」は孟子のいう「必有事焉」であり、「存心不忽」は「勿忘勿助」である。



したがつて、「敬」は「天理」を體認する内容で、その具體的修行方策が「勿忘勿助」ということになる。ゆえに、「勿忘勿助」を體認すれば、それはすなわち「敬」となり、「天理」を體認したことになる。この「敬」と「一」との關係は、きわめて明切しており默契している。

イ　「勿忘勿助」と「中正」

「中正」とは何であろうか。甘泉は「思邪なし。」のことであるといっている。

中山劉子が姪の濬をつれて、甘泉のいる觀光館を訪ね、まさに永豐に歸ろうとするとき、甘泉に贈言を求めた。そこで甘泉は、次ぎのように話をした。

「私は何もいうことはない。しかしながらかつて聞いたことがある。それは、『學は道に入るをもって至るとなし、人は聖に至るをもって成るとなし、心は中正をもって要となす。心中正ならざるは邪なり。』ということである。だ

から。論語の『思邪なし。』こそ中正であり、『忘助』は皆邪思である。」

と。

中山子劉子携其姪濬、來訪予觀光之館。將歸永豐、求贈言。甘泉子曰、予何言。然吾嘗聞矣。學以入道爲至、人以至聖爲成。心以中正爲要。心不中正邪。故曰、思無邪。故忘助皆邪思也。（甘泉文集巻一七「送劉中山還永豐小序」頁七二）

しからば、「中」と「正」との關係はどうであろうか。甘泉は、「勿忘勿助」が分けて説明できないといっている。これについて、次ぎのような問答がある。

王元德が湛甘泉に、

「『中正』の二字は最も味わうべきである。しかし、いまだかつて『中』を體したことはないが、『正』を用いないことはなかった。して見ると、『中』はすなわち、『參前倚衡』の體のあらわれであり、『正』は『參前倚衡』の體の存したものである。體用は一原で、何の想像も安排も用いる必要はない。これは實際の修行にあるのだろうか。」

と質問すると、甘泉は、

「『無在無不在』の五字は分けて説明することはできない。『勿忘勿助』の四字もまた然りである。この數文字は、分明に『中正』の本體を畫き出している。すなわち『中正』も分離して説明できないのである。したがって、『參前倚衡』は實にこの『中正』の狀態にあって、自然と生き生きとしてくる。どうして安排や想像に待つ必要があろうか。」

と答えた。

元德謂、中正二字最可玩。未嘗有在其體中矣、亦無不在其用正矣。中則①參前倚衡之體見、正則參前倚衡之體存。體用一原。何消像想。何消安排。是實功否。無在無不在五字、不可分說。勿忘勿助四字亦然。此數字分明畫出個中正之體。參前倚衡實於此時節、自然潑潑地。何時安排想像。

① 論語に「子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也。夫然後行。」（衞靈公）

とある。

では、「中」と「中正」とはどんな關係にあるだろうか。「中」は體をいい靜的なものであるから、そのままでは「中正」とはならない。「中」が動的になったとき、すなわち「中す。」という狀態になったとき、「中正」となるの

である。それは「勿忘勿助」の間であると甘泉はいう。

周顯榮が揚州府の學生に、「論語」の「君子不重則不威。」の章を講じた際、終ってから湛甘泉が、これらの學生と話し合っている中に、「中正」を右のように說明している。

「この章の眼目は『重』を立てることにある。『重』を立てる修行は忠信にあるのみ。だから『忠信を主となす。』という。では何を忠信というか。心を『中にする』ことを忠といい、心を實にすること、すなわち心に僞りのないことを信という。人の心に僞りのあるのは、心が『中して』いないからである。もし心が『中して』いるときは、どうして僞りがあろうか。しからば何をもって『中す。』となすか。それは『勿忘勿助』の間で、このとき心は『中正』なのである。したがって、こういう狀態のとき忠という。このように心が『中して』いるときは、どうして心に僞りがあろう。だからこれを信というのである。時時念念このようであれば、これを主という。よって、人がよく忠信であれば、內重く、內重ければ自然と外に威嚴が現われるのである。」

と。

立重之功在忠信耳。故又言主忠信。何謂忠信。中心之謂忠、實心之謂信。人之心不實由其不中心。若中時何有不實。何以爲中。既勿忘又勿助、勿忘勿助之間、心便中正。是謂之忠。心中時時有不實。是謂之信。時時念念如此、是謂之主。人能忠信、則內重、內重則外便威。（甘泉文集卷二〇「揚州府縣學講章」頁一五）

これによれば、「中す。」はすなわち「中正」であるとし、「中正」は「勿忘勿助」の間にあらわれるとする。これは、「中正」を定義づけた語として注目すべきである。「約言」においても、『中正』は『勿忘勿助』の間の謂なり。」といっている。

人者天地之心、而氣者天地之氣。充也者非但體之充也。充之而天地塞焉也。直者正也。正者中也。中正者勿忘勿助之謂。（甘泉文集卷二一「約言」頁六）

嘉靖七年（一五二九）、六十三歲の夏、湛甘泉は南京吏部右侍郎に昇進し、その年の暮、各部の同志を新泉に集め、大道を論じ合った。そのとき學生が忠信を知らないので、それを說明したが、その際も前述した「揚州府縣學講章」と同樣なことをいっている。

ここにおいては、「中正」の語は用いないが、『勿忘勿助』の間すなはち心中す。」といっている。「中正」と「心中す。」は內容的には同一であることは、既述の通りである。

戊子歲除、召各部同志、飲于新泉、共論大道。既而語

羅民止・周克道曰、忠信者體認天理之功盡在是矣。中心爲忠。心中故實。是謂之信。心之不實、全是不中不正之心。爲之問、如何中心。曰、勿忘勿助之間則心中矣。（甘泉文集巻二三「語錄」頁二三）

湛甘泉が天泉書堂において、「孟子」の「盡其心者知其性也。」の章を講じたとき、「盡心」の問いに對して、「忘るればすなはちこれを失ひ、及ばざるはもとより盡さず。助くればすなはちこれを失ひ、過ぐるもまた盡さず。ただ『勿忘勿助』の間、『中中正正』なればすなはち、廣大高明の體完完全全なり。」といつている。「中中正正」は「中正」を強調したものである。

忘則失之、不及固不盡。助則失之、過亦不盡。惟勿忘勿助之間、中中正正則廣大高明之體完完全全。（甘泉文集巻二〇「天泉書堂講章」頁二六～二七）

以上述べたことによって、「中正」はどういう場合に「中正」となるか理解されたであろうが、湛甘泉が聶文蔚に答えた手紙の中に、明瞭に『勿忘勿助』の間、ただこれ『中正』の處なり。」といっているのを見れば、「勿忘勿助」の間を修行によって體認すると、それがすなわち「中正」であることがわかる。

來諭、說忘助二字、乃分開看。區區會程・孟子之意、只作一時一段看。蓋勿忘勿助之間、只是中正處也。（甘泉文集巻七「書」〈答聶文蔚侍御〉頁二九）

ウ「勿忘勿助」と「全放下」

「全放下」の語は、「甘泉文集」に二ヵ所見える。しかしこの語は、湛甘泉の獨創ではなく、程明道・陳白沙の說を繼承したものである。

潘洋が最近甘泉に會って、「全放下」の說を聞き、この說はなはだ生き生きとしている。ところが今の人は、心意が事物を追っている。天下の事物を周旋することは、朱子も自ら會得しているが、心の高明廣大の本體は全く知らない。すでに心にかかわりがあると、事物がやってきても、周旋することができない。だから「全放下」が一番よい。この心を常に高明廣大にしておけば、何事も感に隨って應じ、自然事物の條理が大いに行なわれる。ここには全く何物もない。それはちょうど、一燭が部屋の中央にあって、四面を照らすと同樣である。ところが、これを移して部屋の一處を照らすと、照らさないところの出るのは、どういうわけかを尋ねたとき、甘泉は、「すべて何事も『全放下』でないと、決してうまくいかない。この語は程明道もわが師白沙先生も、かつていわれた。この『全放下』は『勿忘勿助』の二勿字と同じである。『放下』してこそ、

『天理』はあらわれる。したがって、燭照の喩はまた切實である。堯の『欽明文思、四方に光被す。』と同じで、一燭が光々と照らすと、旁燭の光がわからなくなるというのも、また適切である。今の人はおそらく『明哲』の本體を知らないのだ。」

といった。

詳近見先生、有全放下之說。甚是活法。今人有心心意意逐在事物。欲周旋天下事者、彼亦自以爲得、殊不知此心高明廣大之體。既爲所累、事至物來、反有不能周旋者。不若全然放下。使此心常高常明常廣常大、隨感而應、自然事事物物各有條理大行。不加窮居。不損得與不得、都無一事。正猶一燭停停在中、四面皆照。若移照一處、則有所不照者如何。

先生曰、非全放下終難湊泊。前輩有此說、白沙先師亦嘗道之。此與勿忘勿助二勿字同。纔放下便天理呈露。燭照之喩亦切。堯之欽明文思、與光被四表同。一根楊子雲明哲煌煌、旁燭無疆亦說得好。恐未知明哲之體耳。(甘泉文集卷二三「語錄」頁一三)

湛甘泉が潘廷評に答えた文中に、「不着絲毫」は「勿忘勿助」であり、とりもなおさず「無欲」である。「直行打破」よりは「全放下」にこしたことはない。「全放下」であれば、「破關入奥、絲毫不着。」であるからだとある。したがって、「全放下」は「勿忘勿助」ということになる。

云不着絲毫最是的當。孟子勿忘勿助正是如此。如此卽無欲矣。云直行打破、不若與全放下。全放下則破關入奥、絲毫不着。無欲靜虛動直、而聖可幾矣。(甘泉文集卷七「書」〈答潘廷評〉頁三三)

また、洪峻之に答えた書中に、「全放下」はすなわち「勿忘勿助」であり、これではじめて「天理」があらわれる。「全放下」でなければ、すべて物事はうまくいかない。「不放下」は意必固我の私であるといっている。

全放下卽勿忘勿助。如此天理便見。故曰、非全放下、終難湊泊。不放下卽意必固我之私。(甘泉文集卷七「書」〈答洪峻之侍御〉頁四三)

これを要するに、「全放下」は心に一物なく、わだかまりのないことである。すなわち高明廣大な心である。心が高明廣大であれば、何事も素直に自然に受け入れられる。したがって「不着絲毫」ということになり、「勿忘勿助」となる。よって「全放下」は「忽忘勿助」なのである。

四　「勿忘勿助」と「自然」

いったい甘泉は、なぜこのように「勿忘勿助」を強調す

ののであろうか。それは「自然」の説への道程であり、「隨處體認天理」の説の裏づけなのである。

甘泉の師、陳白沙は、「自然」をもって宗とした。甘泉もまたこれを受け継いだ。しかし陳白沙の當時は、まだこの「自然」の説を疑う者が多かったが、湛甘泉はこれを服膺し、入門後四十年になろうとするときに、やっとこの説を信ずることがますます篤くなったと述べている。

このことは、史氏恭甫が新泉精舎の前に堂を建てたとき、これを「自然堂」と名づけたのが甘泉であり、さらにその「序」と「銘」を作ったのも甘泉であることによって、深く肯首される。彼は「自然堂」の名の由來を、次ぎのように述べている。

この堂に「自然」と名づけたのは、「自然」は聖人の「中路」であり、聖人は天地萬物の變化に順應して、何事も行なうからである。「自然」にはおのずから「中」があり、聖人の「路」と一つである。だから、学者が聖人を學ぼうとするなら、「自然」と一致する。したがって、まず聖人の「中路」を知らなければならない。なお、上の「自然」の説に付隨して、老荘が「自然」を明らかにしたというのは、惑いたるはなはだしといい、さらに老子書の僞作に言及しているのは、注目しべきことである。

夫堂何以名自然也。夫自然者聖人之中路也。聖人所以順天地萬物之化而執。夫①天然自有之中也。夫路一而已矣。學者欲學聖學、不先知聖人之中路、其可至乎。先師白沙先生云、學以自然爲宗。當時聞者惑疑焉。若水服膺是訓、垂四十年矣。乃今信之益篤。説者乃謂、老莊明自然惑甚矣。史氏恭甫作新泉精舎之前堂、既成。名曰自然堂。水敬爲序而銘之。俾學者庶有覺焉。（甘泉文集巻二一「雜著」〈自然堂序〉頁三～四）

注①「天然」は「自然」と同じ。

さて、甘泉のいう「自然」とは、いかなる概念であろうか。彼の「銘」によれば、

「自然」とは、ただ自然にそうなのだ。天地はいわずして蒼然隤然であり、萬物には熙然怡然として、その意が傳わる。そこには何等の人爲もない。すべて造化の神のなすところである。されば、「自然」の何たるかを知るには、「勿忘勿助・無爲」の機を知ることが大切である。それは、天地萬物と我とが一體になつて、初めて到達し得るものであると述べている。

或曰、自然者何以云然。夫自然者自然而然。吾且不能知其然。吾又何以知其所以然。問之天地、天地不言而

蒼然隕然。問之萬物、萬物熙然怡然、不言而其意已傳。天地人物神之所爲。曰、神所爲何以思。惟吾何以握其機。勿忘勿助・無爲而爲、有事於斯、若或見之其神。

知幾、其行不疑。窮天地而罔後、超萬物而無前。天地萬物與我渾然。一闔一闢、一語一默、各止其極、莫見其迹。莫知其然。是謂自然。（甘泉文集巻二一「雑著」〈自然堂銘〉頁四～五）

では、湛甘泉がこの「自然堂」に、「序」と「銘」とを作ったのは、いったい何歳の年であろうか。「序」の中に、「若水服膺是訓、垂四十年矣。」とあることからすれば、少なくとも六十六歳ごろと考えられる。なぜならば、甘泉が陳白沙の門人になったのは、擧人にあげられた孝宗の弘治五年（一四九二）、二十七歳のときと推定されるからである。このことは、甘泉が世宗の嘉靖三年（一五二四）、五十九歳の年に、彼の學説である「隨處體認天理」の説を裏づける「心性圖説」を作り、天地萬物と我とは一體であると説いたこととも相應じて、おのずから理解される。

湛甘泉の思想の淵源は、天の「自然」である。この「自然」を體して行動するのが聖人であり、人間はだれも、これを目指して生きていくところに、眞の人間性を發揮することができるとする。人間性は、人皆生まれながらに、天から賦與されたものであるからである。

この「自然」は、どうすれば體認できるというのであろうか。それは、「勿忘勿助・無爲」を體認する以外にないと甘泉はいう。したがって、「勿忘勿助」は「自然」を體認する具體的修行方法なのである。

（東京都立赤坂高等學校長）